



# “源溪山だより”

<https://chouanji.p-kit.com/> 令和7年12月②  
住職 恩田仁志 gen-chouanji@aka2.gmobb.jp



## ◆その時は…

江戸に生きた鳶屋重三郎を主人公とした大河ドラマ「べらぼう～鳶重栄華乃夢嘶」が終わりました。重三郎は寛政9年5月6日に亡くなっていますが、最後の日の言葉は史実に基づき次のようにありました。

「自分は今日の午の刻に死ぬだろう」

実際には午の刻より数時間遅い夕方に亡くなつたと記録されているようです。

脚気を患い、死期を悟っていたというものの、一般的にはこのような臨終を迎えることは難しいことです。



今月初旬の掲示板です。

いつも終わりは  
突然やつてくる  
どんな人にも  
当たり前に  
明日はやつてない  
また会える幸せを  
忘れてはいけない



重三郎にとってのその日も、急であったと言えなくないですが、それでも特異なことでしょう。

多くの人にとって、この詩の冒頭部分は共感できるのではないでしょうか。

我が実父母とも、要介護の暮らして、覚悟はしていたものの、その時は突然やってきました。

父とは普段と同じように「おやすみ」と声かけをし、次の日は同じように一日を過ごすであろうと思っていました。でも…。

母は施設で暮らしていました。意思疎通もままならず、食事を自身で口に運ぶこともできませんでしたが、大きな心配事なく過ごしていました。でも…。

今年も檀家様、知人、友人などとの別れがありました。ご親族の多くから、やはりその時は突然やってきたとお聞きしました。

今月中旬の掲示板です。

人は亡くなつてからも  
人を支えられるのです

故吉行和子  
(令7年9月逝去)



生身の人間同士が、顔を合わせたり、声を交わしたりすることはとても大切なこと。でも亡くなつてからも関係が切れるわけではありません。

特に親子はいつまで経っても、どんなに歳を重ねても親であり子です。親の支えを感じるという言葉に違和感はありません。吉行和子さんが感じられた出来事は、ご著書にゆずるとしますが、残された言葉は理解できます。

さらにいえば、亡くなつてからの方がいつでもどこでも会うことができると言つてもよいと思います。

生死を超えて、人と人の出逢いを大切にしたいものです。